

芸術と政治社会のダイナミズム
Art & Socio-Political Dynamism

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」

日時：2018年9月22日（火）14:00-17:00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館第1会議室

講演者：ロミー・ゴラン（ニューヨーク市立大学）

「20世紀の芸術と政治：四つのエピソード」

Romy Golan (The Graduate Center of the City University of New York)

Art and Politics in the 20th century: Four Episodes

サラ・ウィルソン（コートールド美術史研究所）

「マルチェッロ・ブロードスキー：思想の炎」

Sarah Wilson (The Courtauld Institute of Art)

Marcelo Brodsky: the Fire of Ideas

司会：松井裕美（名古屋大学・特任助教）

コメンテーター：橋本一径（早稲田大学・教授）

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「イメージ文化史」では、ニューヨーク市立大学教授のロミー・ゴラン氏とコートールド美術史研究所教授のサラ・ウィルソン氏をお迎えし、「芸術と政治社会のダイナミズム」というテーマのもとご講演いただきました。

まず、コーディネーターのお一人、松井裕美氏より、本講演会の企画意図および趣旨について説明があり、お二人のご講演者について紹介された。その後、さっそくゴラン氏に「20世紀の芸術と政治：四つのエピソード」という題目でご発表いただいた。ゴラン氏が中心に取り上げたのは、アメリカで活躍した日本人写真家、角南壮一による、モネの『睡蓮』とその前に座る妻を撮影した作品、Renato Gutuso（レナート・グットゥーソ）による絵画 *Boogie Woogie in Rome*（「ローマブギウギ」）、Alfred Hitchcock（アル

フレッド・ヒッチコックの *Vertigo* (「めまい」) である。これら作品の特色や背景、雑誌に掲載された批評等の分析を通して、作品がその時々に応じて異なる地政学的な意味を持つことを解き明かされた。ご講演後、ゴラン氏のご発表について松井氏によるまとめ、会場からの質疑応答、登壇者同士の意見交換がなされた。

つづいて、サラ・ウィルソン氏は、「マルチェッロ・ブロードスキー：思想の炎」という題目で発表された。日本ではまだよく紹介されていないアルゼンチン出身の写真家、Marcelo Brodsky (マルチェッロ・ブロードスキー) について、特に *The Fire of Ideas* (「思想の炎」) とタイトルのつけられた一連の写真に基づく作品について取り上げられた。これらの作品は、世界各地の政治的なイベントで撮影されたものであり、白黒写真の一部に色を付けたり、色ペンでスローガンや考えを書き込んだりすることで作品として仕上げられている。ウィルソン氏はこれら一連のイメージについて、時代背景なども踏まえながら詳細に分析された。ご講演後、ウィルソン先生のご講演について、松井氏によるまとめと、会場からの質疑応答、登壇者同士の意見交換がなされた。

両講演が終わった後、コメンテーターの橋本一径先生が、関連する様々な写真画像を交えながら、講演者に質問され、ご登壇者同士の活発な議論がつづいた。最後に会場からの感想や質疑応答を経て、盛況のうちに閉幕した。

(記録：常田槇子)



